

[特集]

松江藩7代藩主「松平治郷」、号を「不味」

名君か?
放蕩大名か?
その答えは

グッとくる
山陰

2018 秋
Autumn

自由にお持ち帰りください

[山陰の逸品]

城下町「松江」より

お殿様好みを探して—。

[グッとくるコラム]

茶目っ気
たっぶりの不味さん

藤岡 大拙 (山陰いいもの探果隊 隊員)

【表紙写真】 観月庵 (かんげつあん)

堀川を優雅に行き交う遊覧船が、普門院(ふもんいん)橋を渡った先にある「観月庵」は、松平家7代藩主・松平治郷(不味)がたびたび舟で訪れ茶事を催したという不味公ゆかりの茶室。松江藩初代藩主・堀尾吉晴が松江城を築城し、城下町を造成した際に開創された普門院の境内にある。
鳥根県松江市北田町27
アクセス / JR松江駅より松江レイクラインで塩見縄手バス停下車、徒歩約10分
電話 / 0852-21-1095



山陰いいもの探果隊 隊員
しまね文化振興財団 理事長
藤岡 大拙
ふじおか だいちろう

1932年鳥根県斐川町生まれ。しまね文化振興財団理事長。郷土の語部として、古代出雲の魅力や現代に継承される出雲人の精神性を日本中に発信し続ける出雲学の提唱者。ユーモア豊かな語り口から聞こえてくる出雲神話はとても興味深く、また分かりやすい視点で人々を神話の世界に引き込みます。

松平不味公(治郷)は十七歳のとき、父宗衍の跡を継いで藩主となった。目の前には巨大な借金山が聳えていた。だが、彼は敢然としてそれに立ち向かおうとした。藩政改革への気魄がみなぎっていた。十八歳からは茶の湯に、十九歳からは禅修行に打ち込んだ。彼は凝り性だった。いいとなると、とことん熱中した。こういう点を見ると、なんだか近寄りたがたい性格のように思われる。ところが、そうではない。あるとき、夫人の影楽院のために茶を点てることがあった。彼女が茶を喫し、茶碗を白い茶巾でぬぐうと、茶巾に赤い口紅がついた。不味公はそのとき何も言わず、次のとき赤い茶巾を用意したという。優しい心根である。不味公は茶目っ気であった。

茶目っ気
たっぶりの不味さん

彼の戯れ歌に次のようなのがある。「茶を立て 道具求て 蕎麦を喰 庭を作りて 月花を見ん」と歌い、「この外望これなし」と後書きし、「大笑々々」とつけ加えている。つまり、茶目っ気たっぶりなことを歌って、後で「冗談々々」と追記しているのだ。また、不味公が松江にいたとき、江戸・天眞寺の大巖和尚に送った手紙に、「松江には火事などありませんが、この節、江戸では毎日火事があるって、さぞかし面白いでしょう。羨ましいことですよ」と書いて、「御一笑々々」とつけ加えている。「冗談ですよ」と断っているのだ。不味公にこんな側面があると知ると、ぐっと親しみやすい人物になってくるであらう。



山陰いいもの探果隊がプロデュースするオリジナルブランド
山陰いいものセレクションがデビューしました。



日本酒 4本入り (内容量 各100ml) 1,800円



第一弾は、日本酒フリークも注目する“山陰の酒”。
鳥取の蔵元が自信を持っておすすめする銘酒を4本セットにした「山陰銘酒めぐり 因幡編」です。

詳しくはWEBで [山陰いいもの](#) [検索](#)

- [取り扱い店舗] ●おみやげ楽市 鳥取店 鳥取県鳥取市東品治町111-1 JR鳥取駅構内 TEL.0857-26-6917 ●おみやげ楽市 米子店 鳥取県米子市弥生町15-16 JR米子駅前広場 TEL.0859-31-6630
●おみやげ楽市 松江シャミネ店 鳥根県松江市朝日町宇伊勢宮472-2 JR松江駅構内 TEL.0852-26-1539



山陰を走る新たな観光列車「あめつち」 運行区間:山陰本線【鳥取～出雲市】

運転時刻【下り】鳥取 → 出雲市					運転時刻【上り】出雲市 → 鳥取							
鳥取	倉吉	米子	安来	松江	出雲市	出雲市	玉造温泉	松江	安来	米子	倉吉	鳥取
9:00発	9:45発	11:06発	11:16発	11:45発	12:47着	13:41発	14:26発	14:43発	15:22発	15:35発	16:36発	17:36着

●乗車券の他に普通列車の指定席グリーン券が必要です。(全車指定席)
詳しくは、山陰いいもの探果隊公式サイトをご覧ください。 [山陰いいもの](#) [検索](#)



グッとくる山陰 秋号

発行元 / JR西日本米子支社 鳥取県米子市弥生町2
☎0859-32-0255 *記載の情報は、2018年9月1日時点のものです。



実はとっても奥深い! 魅惑の「山陰」探果記
[山陰いいもの](#) [検索](#) 右記コードからサイトへGO! →



松江藩7代藩主「松平治郷」、号を「不昧」

名君か？ 放蕩大名か？ その答えは

松平治郷(不昧)

1751年～1818年
松江藩松平家7代藩主。借財に苦しむ藩財政を好転させた名君であり、自ら不昧流茶道の祖となるなど、大名茶人として知られたお殿様。出雲国内に産業振興の基礎を築き、一方で、確かな審美眼で成し遂げた茶の湯の世界への功績によって日本の茶道史にその名を残す。



松江四季眺望図

陶山勝寂(すやましようじやく)筆
株式会社山陰合同銀行蔵

城下町松江は、中海と宍道湖を大橋川でつなぐ水運要衝の地で、荷物を積んだ船が集散する物流の拠点でした。その盛んな様子を床几山上から描いたもの(幕末あるいは明治初年頃)。日本海と宍道湖を抱えることで起こる、幾重にも重なる雲が立ち上がる曇天の光景が出雲国の由来を感じさせています。

今年から数えて200年前の文政元年(1818)は、江戸・大崎(現在の東京・品川)で、出雲国松江藩の松平家7代藩主が68歳で逝去された年。藩主時代の名を、松平治郷。退隠後は、号の不昧を名乗られた大名茶人。17歳で藩主となり、長男に譲るまでの39年間19回の参勤交代でお国入り。生涯で計21回も出雲国を訪れたお殿様は今でも地元の人々にとって身近な存在。剃髪に十徳をお召しになった「不昧さん」なのです。

知られざる 真の姿 名君「治郷」

水の都として知られる城下町松江は、現在、京都・金沢と並ぶ、茶処・菓子処です。堅苦しい作法にこだわらず、ごく自然に薄茶に親しみ、四季折々の和菓子をいただく習慣は、出雲国の人々にとっては日常的な光景。この地の茶の湯文化を語るうえで切っても切り離せない、馴染み深い存在が「松平治郷」またの名を「不昧公」です。

寛延4年(1751)2月14日、江戸・赤坂の藩邸で、松江藩6代藩主・松平宗衍の次男として誕生します。長男の夭折により世継となった後の治郷は、幼少期から、茶道・書道・仏道・弓・槍など身分の高い家では必須とされた教養を身につけていきました。明和4年(1767)12月7日、父の後を継ぎ、17歳で藩主となった治郷ですが、その前年に初めて松江の地に入ると、藩主時代の参勤交代で19回、退隠後に2回、計21回もお国入り。松平家10代の

誰よりも領国を愛したお殿様でした。若くして茶の湯に執心し、禅に打ち込んだ治郷は、21歳のとき、すでに号「不昧」を授かっています。自ら不昧流茶道の祖となり、確かな審美眼で1000点にも迫る天下の名物茶器を収集した大名茶人——。そんなところから、茶器の購入費用に膨大な藩費を当てた放蕩大名という悪評が長らく囁かれていました。けれど、先頃発表された、藩政時代の財政記録『松江藩・出入捷覧』によって、そのほとんどを、藩の全体財政の8%程度で「お手許金」、いわゆる自身のお小遣いで購入していたことが判明。浪費家などという汚名は濯がれました。

それどころか、近年の研究により治郷の政治力が再評価されています。藩政改革により、50万両あったという松江藩の借金を次代も含め足かけ74年で完済。明治4年(1871)に行われた廃藩置県の際、松江藩の御金蔵には11万両、現在のお金にして110億円が蓄えられていたといわれています。

幕末にかけての90年間、人口増加率が0.1%という日本の中で、松江藩の増加率は全国1位の34%。全国でも有数の富裕藩となっていたのです。

割子そば

江戸時代、庶民の食べ物とされていた蕎麦が大の好者だった治郷は、鷹狩りの際も「蕎麦が食べたい」といった重箱に蕎麦を詰めさせたのだそう。当地では重箱を割子ということから、つゆを直接かけて食べるこの蕎麦を「割子そば」と呼ぶようになりました。



山陰中央新報社文化事業局
企画・指定管理事業担当
文化センター企画事業担当
明々庵・赤山茶道会館支配人
島根県茶道連盟事務局長

森山 俊男

昭和49年山陰中央新報社入社。広告局、大阪支社、浜田総局、広島支社、米子総局、文化センターを経て、平成24年4月から明々庵・赤山茶道会館支配人、平成26年3月から島根県茶道連盟事務局長。今回の本編を監修して頂きました。

菊文棗

初代 小島漆壺齋(こじまっしゅこさい)作
松江歴史館蔵

松江藩の塗師として代々と伝統を継承し、当代七代目漆壺齋に至る小島家。黒漆の真塗で蓋の甲に表菊・裏菊の二輪が金蒔絵(きんまきえ)で表される棗(なつめ)は優雅で格調高い。不昧が求める美を具現化した職人たちにより、洗練されたお好み道具が数多く創出されました。



「治郷」と「不昧」

二つの名前をもつお殿様

【藩政改革を成功させた治郷】×【大名茶人と呼ばれた不昧】



人參方の門

財政難立で直し改革の主要事業のひとつ「高麗人参栽培」。先代が果たせなかった栽培に、治郷の代で成功。文化10年(1813)、生産工程を一括管理する「人参方役所」が、天神川沿いに設けられました。現在は、ひっそりと門の屋根だけが残されています。

治郷の実績

17歳で藩主となった松平家の世継は、父の果たせなかった藩政改革を推進します。当時の松江藩は、幕府から命ぜられた比叡山延暦寺の修復工事費用や、宝暦の飢饉による大凶作などの影響が響いて、困窮する破綻寸前の財政。周囲では「雲州様(松江藩の藩主)は滅亡するだろう」と噂されるほどでした。そこで改革の実権を握ったのは、17歳の藩主の優秀なブレイン中堅家老・朝日丹波でした。増税と儉約、治水河川の改修や産業育成など次々に実施。一連の改革は、先代が試みて失敗した事業を反省すべきは反省し、新たな工夫を加えて、新機軸を打ち出す「御立派の改革」と呼ばれました。

治郷が本格的に財政改革に着手したのは、朝日に隠居を許した27歳の頃からといわれます。そして、藩主自らが政治を行う御直裁を、46歳で宣言。退隠する56歳まで敢行されました。治郷の代で行われた代表的な改革には、次のようなものがあります。

当時、斐伊川は洪水を繰り返す暴れ川でしたから、城下を水害から守るため、日本海へ直接注ぐ新たな排水路が必要と考え、人工河川・佐陀川を開削。これは水害を防止するだけでなく、城下から日本海へ至る運河としての役割も担うものでした。

また、幕府が奨励した「薬用人参」の栽培もそのひとつ。全国的にも成功する藩がほとんどなく、先代も断念していた栽培でしたが、治郷の命により再開。苦難の末に成功すると、松江藩は原材料の集荷から製造・出荷までを担う役所「人参方」を設立。大陸にまで輸出を広げると、莫大な利益を上げて、松江藩の最重要事業となりました。

さらに、中国山地で盛んに行われていた、たたら製鉄や木綿の生産、ハゼの実を使ったロウソクの製造など商品価値の高い特産品の収益も手伝って、藩の財政は着実に好転していきました。

そして木工、漆工、陶芸など、工芸文化が花開いたのも、治郷の時代。出雲国の暮らしを彩る伝統工芸として今も息づいています。



不昧の遺産

幼い頃から茶道に親しみ、やがて禅の世界に惹かれていった治郷は、藩主を退隠すると、号の「不昧」を公称としました。現在、「治郷」より「不昧」の方が馴染み深い理由は、そんな不昧公の肖像画にあるのかもしれませんが。私たちがお殿様を思い浮かべるとき、おそらく100%、剃髪に十徳をお召しになった、いかにも茶人然としたそのお姿。月照寺(島根県松江市)所蔵のこの1点が、唯一残された肖像画なのです。

藩主となる以前から江戸屋敷で茶道を習い、藩主になって以降も様々な流派を学んだ不昧は、独自の流儀「不味流」を立てるほどの茶人でした。江戸時代後期に遊芸化していた茶の湯の流れに利休の「わびさび」を求め「不味好み」という達観した独特の美意識を確立しました。すでに20歳で記した『贅事』の中では、財力にものを言わせて名物茶器を買いたつたり、贅沢な茶会を催すことを戒めています。



薬用人参(高麗人参)

治郷の命を受けた藩士・小村茂重(おむらもじゅう)は、幕府の栽培地である下野国・日光で薬用人参の耕作・肥料・加工方法などを熱心に学んで帰郷。ついに雲州人参と名づけられた薬用人参は、海を渡って中国へも輸出。やがて巨額の利益をもたらして、破綻寸前だった松江藩の財政を潤した。

古今名物類聚

松江歴史館蔵

不昧が陶齋尚古老人(とうさいしょうこうろうじん)の名で寛政1年(1789)から9年間にわたり出版した名物茶器の図鑑。茶碗・茶入れなどの茶道具を中心に名物を類聚(るいじゅう)し、図説とともに実証的に収録されています。中興名物・大名物・名物などの呼称と格付けをした江戸時代を通じて最高の茶書と評されています。

また、39歳から9年間を費やして名著『古今名物類聚』を18冊出版し、名物茶器の格付けを行い、学問的に分類整理しています。これは現在に至るまで茶器の評価基準として継承されている偉大な功績。さらに「名物は天下古今の名物にて、一人一家一世の名物にあらず(茶の湯の名物道具は後世に伝えるべき歴史的文化財であり、個人や特定の家に死蔵されてはならない)」と呼びかけています。確かに不昧は、名物茶器の収集で知られますが、もし私的なコレクターだったのなら、国宝や重要文化財をはじめとする数々の茶器類が、今に残されていた保証などなかったでしょう。

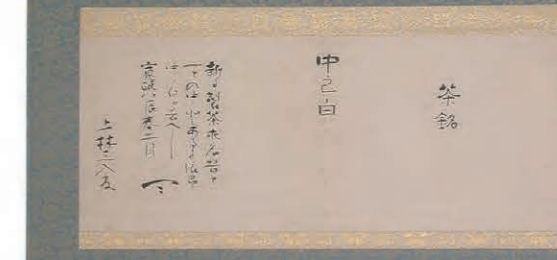
晩年は、江戸の大崎下屋敷に移り、地形を活かした広大な庭園に11もの茶室を構えました。残念ながら、下屋敷が幕府に没収されると、ほとんどの茶室が取り払われてしまいました。現在は、「出雲文化伝承館(島根県出雲市)」に復元展示されている千利休の「独楽庵」によって、その美意識に触れることができます。

没後200年の今も、松江の人は「不味さんは松江藩のお殿様」と言い、東京の人は「不味公は江戸の茶人」と言って譲らない人気ぶり。墓所も、松江市の月照寺に廟所が、東京・文京区の護国寺に五輪の墓碑が建立されています。松江で慕われ、東京で愛される大名茶人「不味さん」。なんて幸せなお殿様なのでしょう。



美保関に伝わる
漁師秘伝の塩辛

鯖の塩辛は、古くから漁師町として栄えてきた美保関で、庶民の保存食として長く重宝されてきました。松田十郎商店の「鯖塩辛」は、山陰沖で獲れた鮮度抜群の鯖を昔ながらの製法で丁寧に骨抜きし、半年間発酵熟成させました。強い塩気の中に鯖のうまみがギュッと凝縮された絶妙な味わいは、一度食べたらクセになります。お酒のあてはもちろん、白ごはんのお供や、サラダやパスタに加えてアンチョビ風としてお召し上がりいただくのもおススメ。



御銘を授かった
茶処松江の抹茶

大名茶人として有名な松平治郷公(不昧公)は松江の地に茶文化を広めました。松江市で創業134年を迎える中村茶舗の抹茶は、丹念に石臼で挽かれた、挽き立ての抹茶です。この「中之白」は苦味も程よく、まろやかな味わいが特徴で、幅広い方にお楽しみいただけます。普段から煎茶やほうじ茶のように抹茶を楽しんで山陰地方の人々のように、松江の茶文化を身近に感じてくださいませんか？



松平不昧公御銘
中之白 (30g) 864円
【取扱店】
○松江駅のおみやげ楽市

有限会社 中村茶舗
鳥根県松江市天神町6番地
☎0852-24-0001
https://www.nippon-tea.co.jp



中村茶舗では
挽きたての中之白を
一服お点てします

中村万紀子さん

お殿様好みを
探して

城下町「松江」より



不昧公好みの
現代の茶菓

宍道湖を望む立地にある湖畔の菓子処「清松庵」は、伝統と革新を重んじた和菓子を丁寧に手作りしています。湖畔菊は、不昧公愛用の茶道具から創作した新しい茶菓子で、大きな菊を模したデザインは、不昧公愛用の茶道具からヒントを得ています。麦粉を使用した香ばしい生地の落雁。中には、抹茶餡を白餡で包んだ二層の餡が入っており、香り高くコクのある上質な甘さは、煎茶や抹茶のみならずコーヒーマスターや紅茶とも是非お楽しみください。



清松庵 ちばな
鳥根県松江市袖師町11-1
☎0852-32-2345
http://www.sweet-studio.jp/

湖畔菊
3個入り 850円
【取扱店】
○鳥取駅のおみやげ楽市
○米子駅のおみやげ楽市
○松江駅のおみやげ楽市



お茶の街松江の
お土産として
ぴったり！

立花由香さん

良質なめかぶ
たっぷり
食べる調味料

松江市鹿島町の片匂(かたし)地区は良質なめかぶが採れる「わかめの里」として知られています。「めかぶのサラダ」は、片匂地区で獲れたわかめの希少部位「めかぶ」を贅沢に使用し、すりおろし玉ねぎと飛魚だしを加え、めかぶの旨みと食感を最大限に引き出した食べる調味料です。サラダはもちろん、お刺身や豚しゃぶなどあっさりとした料理に加えてお召し上がりいただくのがおすすめです。



めかぶのサラダ
(200g) 850円
【取扱店】
○鳥取駅のおみやげ楽市
○米子駅のおみやげ楽市
○松江駅のおみやげ楽市
わかめの里片匂こいグループ
鳥根県松江市鹿島町片匂495-12
☎0852-82-3721
http://yaoyorozu-market.com



一つ一つ手作りに
こだわっています

山本 健夫さん



松江洋風モナカ しじみ
5個入り 1,400円
【取扱店】
○松江駅のおみやげ楽市
おやつ屋スリール
鳥根県松江市上乃木3丁目18-7
☎0852-22-0828



可食形でも
手土産にも
喜ばれます

野津 正臣さん



和洋折衷
新感覚モナカ

「おやつ屋スリール」は、2007年の創業以来、地元の方に愛されている松江市の小さな洋菓子店。宍道湖の特産「しじみ」をモチーフにした「松江洋風モナカしじみ」は、しっとりとしたアーモンド風味のスポンジ生地に乗ると小豆の食感が楽しい和洋折衷のモナカです。黒糖クリームの上品な甘さとはのかな洋酒の香りが、特別なテイストを演出してくれました。パティシエのこだわりが詰まった味を是非ご賞味ください。



松江藩の
歴史が息づく
酒づくり

國陣酒造は城下町松江の宍道湖湖畔にあります。宍道湖に臨む仕込蔵は松江藩主松平家の土蔵を譲り受け、移築改造した蔵。そこで仕込まれた純米吟醸「不昧公」は華やかで爽やかな香りと、ホッと郷愁を感じさせる余韻が口の中で楽しめるお酒です。松江名物あご野焼やお刺身などと一緒にどうぞ。



純米吟醸 不昧公(720ml) 2,160円
【取扱店】
○鳥取駅のおみやげ楽市
○米子駅のおみやげ楽市
○松江駅のおみやげ楽市
○松江駅のシャミネ内 鶴鶴(ささき)屋
國陣酒造 株式会社
鳥根県松江市東茶町8番地
☎0852-25-0123
http://www.kokki.jp



松平家の
土蔵を譲り受け
お酒を仕込んでいます

岩橋 弘樹さん

伝統を
受け継ぐ
優美な姿

布志名焼 雲善窯は、江戸時代に松江藩の御用窯から始まった250年近い歴史を持つ伝統ある窯元。初代土屋善四郎が開窯し、現在は後継者(土屋知久さん)が歴史を繋いでいる。かつては、松平不昧公好みの茶器を中心に制作を続けてきました。現在は茶碗だけでなく、湯のみや小皿などの生活陶器も作っています。モダンな色彩が魅力的な抹茶碗で、是非日常にお抹茶をお楽しみください。



布志名焼
雲善窯 抹茶碗 3,100円
【取扱店】
○松江駅のおみやげ楽市
布志名焼雲善窯
鳥根県松江市玉湯町布志名428-8
☎0852-62-0738



お土産にオススメの
抹茶碗です！

土屋 知久さん



左記マークのついた商品につきましてはJR駅構内の店舗などで取り扱っております。 ※掲載商品の金額はすべて税込表示です。